

## [社 会]

## 小学校社会科入門期における，地域学習を支援するための手立て

－ 視覚的な資料を使った学習を通して－

五十嵐徳也\*

## 1 問題の所在

平成20年度版の小学校学習指導要領では，改訂の基本方針として，社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察すること，社会的事象に関する基礎的・基本的な知識，概念や技能を確実に習得させること，事象の特色や事象間の関連を説明することや自分の考えを論述することが挙げられており，このことを一層重視することが示されている<sup>1)</sup>。

こうした方針を達成していくためには社会科に対して楽しい，好きだ，と思わせる必要がある。3学年の最初の学習が「学校のまわり探検」であり，生活科から社会科へとステップアップするための大切な時期と言える。ここでの学習では，実際に歩きながら実物を見たり実際の様子を観察したりできることから，多くの児童が学習に意欲的に取り組み，学習はスムーズに進んでいくだろう。しかし，その次の「市の様子」の学習では，多くの学校では実際に見学して学習することが困難となってくる。これがほとんどの学校の現状である。とりわけ，広域となった上越市ではこの問題が顕著であり，学習内容の広がりにより児童の認識がつかないことが問題であると考えられる。

身近な地域の学習が社会科教育において大変重要であることは指摘されており<sup>2)</sup>，社会科の究極の目標である「平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎」となる最も重要な学習の一つである。したがって，ここでの地域学習の取組が，今後地域に対する愛着心を持つことにつながり，このことが極めて重要なことであると言える。しかし現状のカリキュラムにおいて課題となるのは，児童の実態と学習内容の適合であり，初めての壁となるのが小学校3学年の「市の様子」の学習だと考える。発達段階に差がみられ，空間認識が十分に発達していない児童にとって，地図や少しの写真に加え，さまざまな形で資料が提示された方が意欲的に活動しやすい。

平成の大合併により，上越市は周辺13町村と合併し広大な市となった。その結果，小学校3学年で取り扱う地域がより大きくなった。学習指導要領では「自分たちの住んでいる身近な地域」とあるが，上越市の小学校3学年の児童にとっての身近な地域とは，「学校の周りの地域」であると考えた方が適切である。したがって，学校のまわりから広大な市へと学習内容が移る時に，その広がりについていけない児童に対する支援が必要だと考えた。

## 2 研究の目的と方法

本実践では，児童にとっては広域であり身近ではない，市全体の学習をより身近なものと感じやすくするための教材開発を目的とする。そのための方法として，写真資料と映像資料の両方の利点を生かしながら用いて，児童の意欲を引出しながら興味・関心を絶やさないようにすること，また，単元構成を工夫し，市の学習へ入る前の準備学習を行うこと。以上の2点を考えた。

(1) 距離的な広がりを緩やかにするために，学校の周りとお越市をつなぐ板倉区の学習を行う。

前単元の学習では，学校のまわりの探検を行ったが，この次に上越市の学習へ移ると同心円的な広がりにおいて少し無理がある。その部分を埋めつつ児童の空間の広がりを補うために板倉区の学習を行う。ここでは，実際に見ながら学習することはできないものの，行ったことや見たことがある風景をビデオで流し，間接的な経験をしながら学習を進める。そうすることで，意欲を継続させながら学習を進める姿が期待できる。板倉区の名所を5箇所撮影し，逸話などを交えながら学習を進める。

---

\* 上越市立針小学校

(2) 写真や映像資料を効果的に使うことで子どもの気づきを増やし、学習を意欲的に進める。

写真と映像の大きな違いは「動く」か「動かない」かである。本単元では、動かない地図と写真に加えて、動く映像資料を効果的に使うことで、児童の意欲を引き付けながら進める。また、動く資料からしか読み取れない情報も大切にしながら、子どもの気づきを増やし、つかませたい概念をより明確にするための一助とする。

以上の2点が本実践を行う上での有効な手立て、支援であったかどうかを明らかにする。

### 3 実践

(1) 単元名 「わたしたちの上越市」

(2) 単元の目標

- 上越市の特色ある地形や土地利用の様子、主な公共施設の場所と働き、交通の様子や古くから残る建造物などから、地域の様子には違いがあることを理解し、自分たちが日々生活している市に対する誇りや愛着をもつ。
- さまざまな資料をもとにして、地域の様子は場所によって違いがあることについて思考・判断し、考えたことを文字や言葉で表現する。

(3) 児童の実態

3年生は単学級であり、保育園からずっと一緒に過ごしており非常に仲が良く、互いに認め合える明るい雰囲気のある学級である。また、思ったことや考えたことを発表する児童が多く、意見交流が活発になることが多い。しかし、それが一部の児童の間で交流されるため、話し合いに参加できない児童もいる。

学校の周り探検を終えて、児童が身近な場所であっても実際にはあまりよく知らないことがたくさんあった。疑問を解決するために実際に観察をしていく中で意欲的に解決に向かっていく姿がみられた。しかし、市の学習では実際に見て確認することが困難になる。楽しく、意欲的に取り組める学習にするためには、同心円的な拡大を少しずつ行っていくことが必要だと考え、単元の構成を工夫し、児童の経験とかかわらせながら資料を有効に活用して学習を進めていく必要がある。

(4) 指導の手立て

児童が市の特色や理解させたい概念を抑えるために、学習を3つの段階に分けて一つ一つの授業を構成した。

#### ① さまざまな事実に気づく

児童は市のいろいろな場所に行ったことがあると思うが、注意深く観察しているわけではない。そこで、授業の開始時に様子を写真や地図でじっくり観察するとともに、映像を使って意欲を引き出しながら対象の動きを観察することで、子どもの気づきをたくさん出せるようにする。

#### ② 事実を整理する

たくさん出た事実を黒板で整理していく。ここでは関連付けをしやすいように出た事実を性質ごとにくくっていき、まとめの時に考えやすくなるのではないかと考えた。

#### ③ 社会的事象と関連づけて考える（まとめの時間）

市の各地点から出てきた事実をもとに、気づかせたいことを誘発する質問をし、地域の様子の違いとその要因となっていることに気づかせ、まとめる。

(5) 指導計画（10時間）

次	時	学習活動	評価規準
1	1 2	○板倉区の航空写真と地図を見ながら、板倉区の様子でわかったことを発表し合い、山に近い場所と平野部の違いを考える。 ○板倉区の名所を、ビデオで見ながら学習し、文化に関する映像や伝説等について知っていることを共有し合う。	・板倉区には様々な地域があり、その場所に 応じて土地利用の仕方が違うことを考える。 ・地域に古くから残るものについて知り、そ のよさを考えようとする。
2	3	○上越市の航空写真と地図を見ながら、市の外観を確認しながら 気が付いたことを発表し合う。	・上越市には様々な地域があることに関心を もち、進んで考えようとしている。

3	4	○市の商業中心地である富岡周辺を写真、映像を使いながら地図で確認し、場所の様子で気が付いたことを話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地図や写真、映像資料から必要な情報を読み取る。</li> <li>・上越市の土地利用の様子の違いについて考え、それらを表現している。</li> <li>・地域の様子は場所によって違いがあることを理解している。</li> </ul>
	5, 6	○高田公園周辺の様子を写真、映像を使いながら地図で確認し、場所の様子で気が付いたことを話し合う。高田城の今の様子と昔の様子を比べる。	
	7	○高田駅周辺の様子を写真、映像を使いながら地図で確認し、場所の様子で気が付いたことを話し合う。	
	8	○直江津港周辺の様子を写真、映像を使いながら地図で確認し、場所の様子で気が付いたことを話し合う。	
	9	○学習してきた板倉周辺、富岡周辺、高田周辺、直江津周辺を比較しながら、市の様子や特色をまとめる。	
4	10	○上越市の文化遺産を知る。春日山城跡、岩ノ原葡萄園や安塚の雪室について映像を交えながら学習する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古くから残る建造物や特色ある施設などについて理解する。</li> </ul>

#### (6) 授業の実際

##### ① 学習対象の決定まで

学習を行うにあたり、対象とする場所を5地点とした。

ア) 平野部と山間部の特色がある板倉区。

イ) 城下町としての特色を残し、商店街や住宅地があり、たくさんの人が暮らす高田地区。

ウ) 近年商業地区として開発された富岡地区。

エ) 港町の商店街や住宅地と工業地帯の2つの側面をもつ直江津地区。

オ) 歴史的な建造物等が残る春日山地区や岩ノ原葡萄園、地域の特色を生かした安塚の雪室。

以上の5次に分けて学習を進めることにした。各所の航空地図や映像、写真を用意し、各所を視覚的にとらえられるように配慮した。

##### ② 1, 2時間目 (板倉区の学習)

まず、上越市の学習に入る前に、より身近な地域を対象にして学習を距離的に同心円状に拡大できるように進めるために、板倉区について学習した。学校の周りの土地利用の様子は前単元で学習したので、子どもたちも針地区の様子がよく分かっていて、針地区は山に近いが土地が平らだから田んぼが広がっていて、人が暮らしているところが集まっているがほとんどの土地が田んぼに使われているという、以前に学習した時の結論が意見として出



写真1 板倉区の航空写真

(グーグルマップより作成<http://maps.google.co.jp/>)

た。その結論を確認するために、写真1の板倉区の航空写真を提示することで、全員で視覚的に確認することができた。

針地区から少し遠ざかり、山間部の様子を写真、映像とともに児童に提示する。まずは写真1の航空写真を見せながら、「何かあるかな。」と発問すると、「緑色だから森がいっぱいある」「田んぼがたくさんある」と表面的な様子をとらえた。その後、山間部と平野部の違いを学習させるために、航空写真の一地点である寺野地区の映像を見せた。すると、「ここ、行ったことある。」「温泉がある所だね。」「おばあちゃんちがあるよ。」など児童がつぶやき始めた。自分の経験と学習の対象となる場所を結びつけ、意欲が高まる傾向がみられた。しかし、動く映像に対して集中力が高まり、平面地図をじっくり見ることが困難だった。

そこで、針周辺の田んぼと寺野地区の田んぼの写真、針小付近の幹線道路・農業用道路と寺野地区の県道の道路の写真に切り替え、平地の田んぼと棚田の比較をしたり、針地区の道路と山間部の道路の様子を比較したり、近くを流れる川の様子を比較したりしながら、山間部の特徴をとらえた。資料を映像から写真に切り替えることによって、発言が自分の経験ではなく、二つの資料を読み取り、平地と山間部の特徴をとらえるために有効な発言がたくさん出てきた。用

意した資料を適切に使うことで子どもの意欲を引き出し、深く読み取らせるための有効な手段となりうることを確認できた。

2時間目の後半からは、板倉区の特徴ある場所や名所を映像で確認した。糸しん尼の里とそこから見える水力発電所や北陸新幹線、さまざまな伝説が残る山寺薬師や地滑り資料館、県外から訪れる人も多い延命清水、光が原高原などを10分程度で紹介した。

### ③ 3～9時間目（高田地区、直江津地区、富岡地区、春日山地区）

#### ア) 富岡地区

ここ数年で商業地として開発された富岡地区を取りあげた。副読本では取りあげていなかったが、上越市の郊外ショッピングセンター的な役割を果たしており、商店の仕事の学習のためにも、学習しておく利点が多いと考えられたので取り扱うことにした。また、児童の全員が行ったことがある場所としても学習開始直後の対象地域として適切と考えた。

まずは、商業施設の交通状況やインフラ整備などに気づかせるために、上越市全図を見ながらイオン上越店やその周辺にある商業施設を映した映像を見せた。映像で見つけた施設を地図にかきこませることによって、上越市全図から商業施設について考えられるようにした。

その結果、期待通りに「行ったことがある。」とか、「ここ知っている。」というように自分にとって身近な場所としてとらえることができた。また、自動車が多いことに気がついた。そのことから、「この映像は休日に撮ったものだね。」と想像するなど、交通量に着目し始めた。また、車だけではなく、春日山駅から歩いてくる人にも気づき、自家用車だけではなくいろいろな交通機関を使って、人が富岡地区に集まってきていることに気づかせることができた。最終的に、地図上から道路や線路が近いことや高速道路があることを確認し、映像で気づいたことを地図とつなげることができた。

次に、富岡地区の辺りにできた病院やマンションの写真を見せ、お店だけではなく人が住む場所として開発されていることを伝えた。そこで、「なぜここにマンションを建てたのだろう。」と発問したところ、「イオンが近くて便利だから。」「コンビニが近いから」など様々な意見が出たが、結論としては、生活しやすいのではないかとすることにまとまった。

#### イ) 高田地区

人が多く住む場所として高田地区を取りあげた。映像を見ながら、重要な場面で一時停止しながら進めた。動きがあるとやや集中力が欠けてしまうことがあり、じっくりと見てほしいところは映像を止めて考えるようにした。商店街の映像を止め、「人が多い」という意見が出たときに、「どんな人がいるかな。」と聞き返したところ、いろいろな人が歩いていることに気づき、特に高校生が歩いていることから高校が多いのではないかとこの予想をたてた。それを確認するために、地図を出して、高校がどれくらいあるかを確かめた。ただ、高校名までは地図には載っていなかったため、インターネットの地図で確認した。アーケードの利点について触れながら、昔ながらの雁木についても説明した。

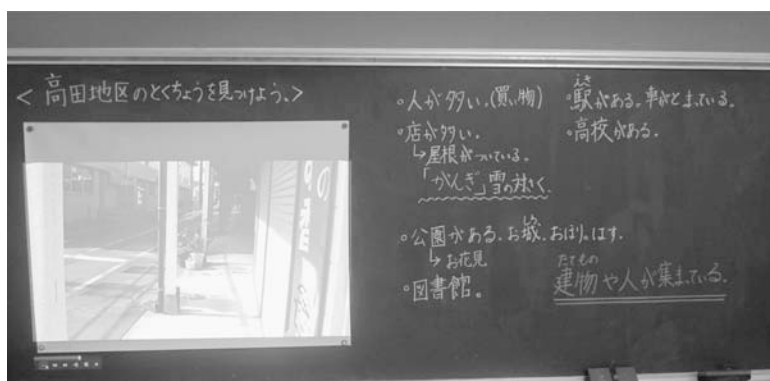


写真2 高田地区の学習の様子

次に写真を見て、湖があることに気が付き、これがお堀であることを確認した。映像でお堀の周りがどうなっているかを見て、高田公園やお城のあたりにも人がたくさん歩いていることに気がついた。お花見で行ったことがあると答えた児童がおり、はす祭についてもふれた。「高田公園はこの辺りに住む人の憩いの場なのではないか」という意見も出て、この点については航空写真や止まった写真では気が付けなかったところではないかと考える。

#### ウ) 直江津地区（授業時の写真）

上越市の工業の中心である直江津港湾を始め、直江津の市街を学習の対象として取りあげた。同じ上越市でも直江津地区にはほとんど行かないという児童がとても多かったが、海水浴場の写真を見ると、「ここが直江津っていつのか。」

という声が多数聞かれた。行ったことはあっても名前を知らない児童が多かった。また、平成の合併前の上越市は知っているが、直江津と高田がそれぞれ一つの市であったことを話すと驚いていた。

この学習では、『わたしたちの上越』に掲載されている航空写真を拡大掲示し(写真3)、じっくりと観察した。写真からはたくさんのことが読み取れ、海岸線の特徴をとらえるには一枚の写真をじっくり読み取ることが必要と感じたためである。

海がある、川が多い、橋が多い、家がたくさんある、工場がたくさんある、土地が四角い、船がある、など多くの事象に気がついた。これらの事象を関連付けていき、直江津の特徴を考えていった。まず、工場と海を関連付けた。工場では水をたくさん使うから海に近いのではないかという考えに至ったが、船があることを考えると、工場で使う材料を船で運んできているから海の近くにあるのではないかと考えが深まった。これまでに直江津港で見つけた事物を手掛かりに考えることができた。また、四角い土地はどうしてなのかということも考えた。大潟区の海岸線の写真を見せると、違いが分かった。ここでは様々な意見が出たが、なかなか真相に近づけず、東京湾の航空写真を見せたり、地震で話題になった液状化現象について話をしたりしながら、液状化現象→埋立地という考えに至った。

ただ答えを教えるだけでなく、児童の生活経験から考えさせることによって、テレビで見たことや聞いたことが学習に生かされる。このことが知識欲をかりたさせ、もっと知りたいという気持ちにつながっていくのではないかと考える。

#### エ) 春日山地区

学習の最後に上越市の魅力を伝えるために、上杉謙信と春日山城、岩ノ原葡萄園、安塚の雪室施設を取りあげて紹介をした。ここでは扱う内容に困ったが、今年の夏は節電への取り組みが叫ばれていたので、「雪室」を利用した施設を扱うことにした。

春日山城について学習する前に、春日山城がどんな城だったかと問いを出し、城の図を3通り出した。ほぼすべての児童が天守閣のある城を想像していたらしく、山の上に大きなお城がたっていたと答えた。現存しているお城はほぼすべてが平城であり、実際の絵図を見せると非常に驚いていた。他にも、城跡から板倉の町が見えることを確認し、近くにある箕冠城が見えたことなどを確認した。他にも謙信の逸話を話し、地域の歴史にふれる機会にはなったと感じた。

後半には、安塚区と岩ノ原葡萄園が冬に降った雪を貯蔵して冷蔵庫や冷房として使用している雪室について紹介をした。今年地震の影響で節電が叫ばれていた中、地域の気候を利用したエコロジーな施設を学習し、雪が降る上越地域のよさについて学習をした。

終末の感想では、「お城のイメージが変わった。」「図書室の上杉謙信の本を読みたい。」「雪室はエアコンを使わなくても冷えるなんて、すごい。」など、これからの地域に対する意欲関心を高めていけそうな内容が挙げられた。

#### ④ 10時間目(学習のまとめ)

最後の時間には、上越市の全体を見ながら学習してきたことをまとめた。『わたしたちの上越』に掲載されている上越市全体を見渡せる航空図を見ながら、「海沿いに工場が多い。」「関川の西側に住宅地が多いから人も多い。」「関川の東川には田んぼが多い。」「山には緑がたくさんある。」などのおおまかな上越市の土地利用の様子を振り返ることができた。

## 4 実践の成果と考察

小学校3年生の学習対象の地域拡大への支援として、視覚的資料の活用の効果を次の2点で考えた。

① 距離的な広がりや緩やかにするために、学校の周りや上越市をつなぐ板倉区の学習を行ったことについて板倉区の学習や富岡地区の学習から、児童にとっての距離は同心円状に広がっているわけではないということが明らか



写真3 直江津地区の工業地域  
(『わたしたちの上越』を拡大表示)

かになった。児童の生活経験から、板倉区の間部や近くでも行ったことがない場所よりも休日等に行っている場所の学習の方が明らかに取り組みやすく、距離的な広がりや緩やかにすることは児童への直接的支援とはならなかった。

しかし、同じ板倉区でも地域によって大きな違いがあることを認識したことは、間接的な支援になったと考える。また、身近な地域でありながらあまり知らなかったことを学び、学習意欲の増大に寄与したと考えられる。板倉区の学習は直接的な支援とはなりえなかったが、地域の多様性をより強く実感し考える場となった。また、地域の拡大により軽視されがちな、より身近な地域を知り愛着を感じるための学習になったことは一つの成果と考えられる。

## ② 写真や映像資料を効果的に使うことで子どもの気づきを増やし、学習を意欲的に進めたことについて

本実践を通して、映像資料を用いることで児童の意欲を高めることができた。行ったことがない場所を映像で確かめることができるのは、児童にとって学習に取り組むきっかけとなっていた。また、行ったことがある場所の場合でも、自分の経験を生かして考えることができた。しかし、映像を流すことで、映像自体に関心が移り、学習目的に対する集中度はやや低くなるように感じられた。

その点を補うために、映像をとどこで停止したり、映像と関連した写真資料を提示したりして、児童の視点を一か所に集中できるようにすることで、目的意識をもって学習に取り組むことができた。その結果、児童の気づきを増やすことができた。写真や映像を見て学習することで、後半には写真を細かい部分まで見て気づきを増やせるようになった。

授業後に行った児童アンケートでは、約90%の児童が肯定的な感想を持っていたことから、学習に取り組みやすかったことが分かる。また、学習したことで覚えていることを自由記述で書かせたところ、映像資料で児童に見せた場所やそこで見つけたものを書いている児童がほとんどだった（工場は海岸線に多い、海岸には埋立地がある、山と平野では道路が違う、高田には高校生が多い、商店街には人が多い、春日山城に行ってみたい、ワインが有名等）。上越市について学習することで、行ってみたい、もっと知りたいと話してくれた児童が多かった。このことから、有効な支援となっていたと考えられる。

本実践では、映像資料と写真資料の両方を場面に応じて使い分けた。児童の意欲を高め、資料を見る視点を集中させることでより効果的に写真資料を活用できた。このことが児童の気づきを増やすことにつながったと考える。

## 5 今後の課題

児童が授業後に「上越市の勉強が楽しかった。」と話してくれた。今後の社会科への明るい展望となった。この学習を通じて、地域を学び、愛着を感じることは社会科の大きな目標の一つであり、達成への第一歩を踏み出したことは大きな成果である。

一方、分かりやすかったと答えた児童が多かったとはいえ、自由記述が少なかった児童もいた。今後は、より多くの児童が考えやすいような資料の提示の仕方を考えていく必要がある。児童がより考えやすい授業づくりを行うために、行ったことが多い場所から学習を計画していくことが考えられる。生活経験をふまえた支援をするために、事前によく行く場所、知っている場所等のアンケートを取り、指導計画をたてていく、地域の多様性をよりとらえやすくするために、地域の特徴がより顕著な場所から学習を始めていくなど、支援の方法を変えることでどのように学習効果が変わるかを検討していきたい。社会の発達により変容していく児童の生活圏をふまえて、効果的な支援となりうる学習計画をたてていくことが今後の課題と言える。

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 社会編」, 東洋館, 2008, p.3~p.4
- 2) 山口幸男 山本友和 編著 「小学校社会科教育の探究」, 学芸図書, 2001, p.37~p.38

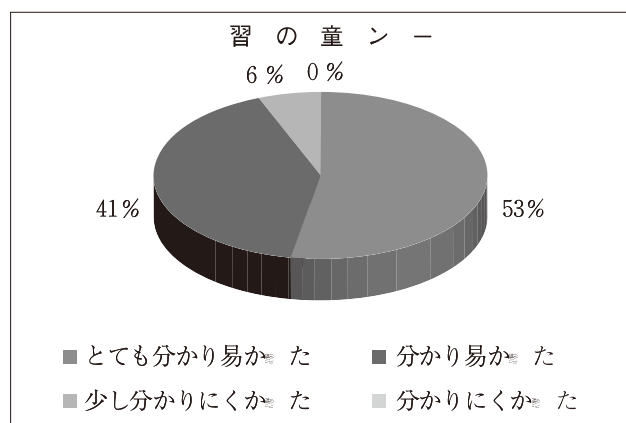


図1 映像資料を用いた授業のアンケート